Vol. 10 Nov 2009

日本小児がん看護学会

Japanese Society of Pediatric Oncology Nursing

－ JSPON －

News Letter

秋も深まり、新型インフルエンザのニュースがますます世の中を騒がせております。会員の皆様、特に臨床でお仕事をされている方々は、日々感染予防や感染した患児・家族への対応にお忙しいことと思います。

８月の研修会では、予想以上の多くの方のご参加を頂き、小児がん看護におけるグリーフケアについて、有意義なディスカッションを行うことができました。また、来る 11 月 28 日（土）、29 日(日)には、「特定非営利活動法人日本小児がん看護学会」と名称を変更して初めての学術集会を開催いたします。会期中に総会も行いますので、総会にご参加いただき、小児がん看護の実践と教育・研究の更なる向上・発展にむけて、皆様のご意見をお聞かせください。

第７回日本小児がん看護学会のお知らせ

第 7 回日本小児がん看護学会は、昨年同様に日本小児血液学会、日本小児がん学会、小児がんの子供を守る会とともに開催いたします。これまでの大会テーマのトータルケアという言葉を頂き、「10 代患者のトータルケア」を看護学会独自のサブテーマとしました。10 代患者に関する問題を整理し、成人を見据えた看護を展開するための指針を参加者の皆様と共に作り上げたいと考えております。多くの皆さまの、ご参加をお待ちしております。

（第7回日本小児がん看護学会　会長　丸　光惠）

会　期：2009年11月28日（土）、29日（日）
場　所：東京ベイホテル東急
看護学会テーマ：10代患者のトータルケア

看護教育セッション1：11 月 28 日(土)　10:30－12:00
子どもの治療・回復を支援するインタラクティブ・ツール

看護ワークショップ1：11 月 28 日(土)　9:00－10:30
実践！　実感！！緩和ケア
緩和ケアの導入のタイミングは？ポイントは？

看護教育セッション2：11 月 29 日(日)　9:00－10:30
英国の”がんの子どもにやさしい”療養環境
～子どもたちの”声”を大切にしたケアを考える～

看護ワークショップ2：11 月 29 日(日)　10:30－12:00
小児がんの子どもと家族に「悪い知らせ」を伝えるとき
－子どもと家族の意思決定を支える－

看護・守る会　合同シンポジウム：11 月 28 日(土)14:40－17:00
10 代患者の死をめぐる問題

学術集会 HP：http://www.congre.co.jp/jsph-jspo2009

第6回小児がん看護研修会の報告

去る平成 21 年 8 月 29 日（土）、国立成育医療センターの講堂をお借りし、第6回小児がん看護研修会（テーマ：小児がん看護におけるグリーフケアを考える）を開催いたしました。日ごろの実践の中で困っている看護師の方が多いためか、事前申込が 167 名と、昨年の参加者を大幅に超える人数でした。当日参加者や関係者も含め、当日の参加者は 208 名と会場の壁に沿って椅子を並べなくてはいけないほど、盛況になりました。

午前中は、慶応義塾大学看護医療学部の戈木クレイグヒル滋子先生と聖隷三方原病院臨床検査科の天野功二先生にご講演いただきました。戈木先生は、今までの先生の研究や臨床でのご経験を元に、「家族の悲嘆と看護師のストレス」について講演してくださいました。亡くなっていく子どもをケアする家族の予期悲嘆と喪失後の悲嘆についてお話頂き、最期の看取りを家族にとってベストなものにもっていく大切さを教えていただきました。さらに、小児がんの子どもと家族をケアしている看護師のストレスとストレス緩和のためのシステム作りについてもお話いただきました。

天野先生は、現在聖隷三方原病院の緩和ケア病棟を中心に、静岡県内のターミナル期の子どもと家族をケアする医療者のサポートもされている医師です。「子どもの死の概念の発達」について、先生の臨床でのご経験や社会の「死」に関する現状を踏まえつつ、発達段階別の子どもの死の概念についてお話いただきました。さらに、子どもの理解度を子どものどのような様子からアセスメントするのか、最期が近づいている子どもとどのようにコミュニケーションをとるのかについても教えていただきました。先生から、必ずしも医療者が死生観を持っていなくてもいいが、「どんな時でも子どもと向き合う覚悟」「子どものために一生懸命になれる心」「大人の考えを押し付けない姿勢」「子どもの死の概念の発達の知識」を忘れずに子どもと関わっていってほしい、とメッセージをいただきました。

午後は、「小児がん看護におけるグリーフケア」について、4 人のシンポジストを迎えて活発な討議が行われました。はじめに「子どもへのグリーフケア」について、国立成育医療センター看護師、後藤清香氏より学童期の小児がんの子どもとの関わりについて話していただきました。具合が悪くなっていく仲間を見守る子どもの姿や、仲間の死を知った子ども達への看護師や臨床心理士の関わり、子どもと親のコミュニケーションを円滑にするための援助など、臨床での事例を中心に丁寧にお話しいただきました。子どもにとってのグリーフケアとして、「死ぬ、イコール終わりではないこと」「亡くなった人の存在」を伝えていくことの大切

さについて話して頂きました。

次に、神奈川県立こども医療センター看護師、竹之内直子氏より、「親へのグリーフケア」についてお話いただきました。親へのグリーフケアは、「子どもをこれから喪失する人」「子どもを喪失した人」のどちらにも大切です。「入院中は子どもと家族にとって残された時間が少しでも良いものになるように努力しているが、亡くなって退院された子どものご家族にできることは何か、と悩むことが多い」と話されていました。実際に竹之内氏が関わった事例への看護の経験をもとに、「子どもをこれから喪失する可能性が高くなったとき」のご家族の反応と看護師の関わりについてお話しいただきました。さらに、退院後のグリーフケアとして、「頑張った子どもの存在を知るもの」として、「ご家族と子どもの思い出を共有できる人」として、病棟からのご家族へのアプローチの可能性についてもお話いただきました。

「スタッフへのグリーフケア」については、茨城県立こども病院看護師、関野晴美氏より、子どもの死に直面することによる看護師のストレスについての病棟での調査結果と現在病棟で実践されているスタッフの精神的ケアについてご紹介いただきました。看護師の方がストレスを感じる場面として、「看取りの場面」や「家族の悲嘆過程に課題があるとき」などが挙げられ、約 6 割の看護師が、「眠れない」「気分が沈む」など、ストレスにより心身に症状が表れていました。さらに、看護師の負担の軽減や新たな視点で問題をみつけることを目的とした再発難治事例や移植事例の場合に「ダブルプライマリー制」を実施したり、困難事例へのケアの振り返りとスタッフのグリーフケアを目的とした振り返りカンファレンスを行っているとのことでした。スタッフのグリーフケアは、どの施設でも必要性は認識していますが、継続的かつ効果的な実施が難しいのが現状です。スタッフのグリーフケアにおいては、看護師それぞれが自分の情緒の動きに気づき、思いを表出する場の必要性と、ケア体験の肯定的な意味づけと積み重ねが大切だと感じました。

最後に、お子様をなくされたご家族の立場から、佐藤祐子氏よりお話いただきました。3 年前に亡くなったお子様との思い出を多くの写真や音楽と共に、お話し下さいました。さらに、横浜市立大学医学部附属病院での遺族会の立ち上げや、遺族外来で受けているサポートについてもご紹介いただきました。佐藤さんの「今でも毎日子どものことを思い出さない日はない。寂しさや悲しみは、乗り越えるものではなく上手くつきあっていくものである」という言葉にとても感銘を受け、看護師が出来ることは、「乗り越える」助けではなく、それぞれのご家族が生活していく中で、お子様との思い出やお子様を失くした悲しみとどう折り合いをつけていくのか、折り合いをつけていく過程をサポートすることなのではないか、と思いました。

会場とのディスカッションでは、それぞれのシンポジストの発表に対して「亡くなった子どもについて他の子どもから尋ねられた時の応え方」「振り返りのカンファレンスの時期」など、具体的な質問が多くありました。さらに、病棟で頑張ったお子様の葬儀への参加についても情報交換されました。ご家族から連絡を受けた場合は行く（看護師も医師も任意）施設や、葬儀の日取りを連絡して欲しいと家族に伝える施設など、様々あるようでした。さらに、四十九日、1 年後などの継続的なサポートや、亡くなった子どものきょうだいへのサポートの重要性などについても討議され、小児がん看護における両親、家族、一緒に頑張った子ども達、そして医療者自身も含めたグリーフケアの必要性や、実施するうえでの困難さなどをあらためて考える機会になりました。

（文責　研修委員　小川純子）

英国の小児がん看護フォーラム＆2 病院視察訪問記

2009 年 7 月 20、21 日に、英国のヨーク大学で 25 周年を迎えた PONF（Paediatric Oncology Nurses Forum）に参加し、その後、2 か所の病院施設を訪問し英国の小児がん看護の現状について視察を行いました。

PONF

このフォーラムは 25 年間続けてきたことによって、英国の小児がん看護の専門家の育成やケア内容の進歩に貢献していました。今回の会議はプレナリーセッションが 10 題、サポーティブケアに関するものが 5 題、思春期のがんの子どもたちの心理面でのケアに関するものが 5 題、POONS（Paediatric Oncology Outreach Nurses）に関するものが 5 題、BMT に関するものが 4 題、治療的看護について 3 題、看護サービスの発展に関して 3 題、思春期や若者について 2 題、栄養に関して 3 題、教育に関してのワークショップが行われていました。中でもティーンエージャーやヤングアダルトと呼ばれる年代の看護に関するものが多く、自分の体調は自分で管理するようになるため、体調の不良を放置して診断が遅れることが多いことに着目し、治療終了後の子どもたちの体験を DVD にして学校や街頭で PR 活動を行っていました。また、ナースプラクティショナーが活動していて化学療法薬の処方も行っていること、口腔ケアに関する発表では実際の写真を見せたり、ガイドラインを示したりしながら、この場合どのようなケアが適切か参加者とのディスカッションを行っていました。ポスターは 15 題で、発表はありませんでしたが、休憩時間に活発に情報交換を行っていました。

病院訪問

リーズにある St.James University Hospital とロンドン

Great Ormond Street Hospital for Children を訪問しました。

両方の病院に共通して言えることは年齢によって病棟が異なり、思春期の子ども達は乳幼児とは別のユニットでケアされていました。看護師は病棟でなくてはならない存在としてプレイスペシャリストをあげていて、プレパレーションの担当で、さまざまなグッズがそろっていました。また多職種の人々が子どもと家族に関わっていますが、その中でも看護師はリーダーシップを取るというよりは、コーディネーターとしての役割を担っていました。英国では“Shared care”という考え方で患者を振り分けているので、地域と中心となる病院との橋渡しが必要で、POONS は活躍していました。家族の中には、この病院でずっと見てほしいという人がいて、その人たちを説得するのが見てほしいという人がいて、その人たちを説得するのが大変な時もありますが、十分に説明して理解してもらい、地域での治療や看護を継続していました。

看護師のメンタルサポートは、病院内の精神科医や臨床心理士がサポートをしているとのことでした。

今回の訪問を通し、英国の看護師の小児がん看護にかける熱意に新たな活力をいただきました。

（小原美江、白井史）

APHON 33rd Annual Conference and Exhibit（米国小児血液腫瘍看護学会議）参加・ロサンゼルス小児病院訪問報告

APHON 参加報告

第 33 回米国小児血液腫瘍看護学会議は 9 月 10 日（木）から 12 日（土）の 3 日間、米国フロリダ州レイクブエナビスタで開催されました。これは、APHON（Association of Pediatric Hematology／Oncology Nurses）が年に 1 回行っている会議であり、主に米国国内の臨床看護師や CPON（Certified Pediatric Oncology Nurse）と呼ばれる小児がん認定看護師の資格をもっている臨床看護師が多く参加していました。

APHON の会長さん
（Ms.Joetta D.Wallace,MSN RN CPON®）
と一緒に

会議のプログラムは、3 日間でポスター発表が 102 題、教育セッション（1 時間）が 23 題と多く構成されており、日本の学会で多く見られる口演発表は 14 題と少数でした。

参加者はこれらのプログラムに参加することにより、看護師免許更新時に必要な単位を取得できる仕組みとなっています。

治療について、小児がん経験者やきょうだい支援、家族への教育プログラム、看護師のエンパワーメントなど、幅広い内容で構成されており、臨床で行われている実践報告が中心でした。あるセッションでは、現在臨床看護師として働いている小児がん経験者と当時の受け持ち看護師が 2 人で自分たちの経験を発表し、参加者から温かいエールが送られる場面も見られました。

また、自由に情報交換や意見交換を行うミーティングなどもあり、参加者同士がメーリングリストを作ったり、活発に議論する場面が多く見受けられました。この会議は、知識を得ることのみならず、同じ分野で働く看護師のモチベーションを高める機会となっていることを肌で感じた 3 日間でした。

ロサンゼルス小児病院（CHLA）訪問報告

梶山会長と CHLA で研修のコーディネートをしてくださったナースプラクティショナー（NP）の Maki Okada さんのご尽力により、今年度の米国 Best Childrens Hospital 10 施設の 1 つに選ばれたロサンゼルス小児病院を 9 月 14 日（月）に訪問しました。私たちは、血液腫瘍科の外来と病棟を見学し、実際に全身麻酔下で行う骨髄穿刺と、感染により入院している 2 歳の女の子の PICC の消毒およびドレッシング剤の交換に立ち会うことができました。骨髄穿刺は、Physician Assistant（医師助手）という資格を持つ看護師が準備から穿刺、採取までを行っており、その手際のよさに驚きました。腫瘍科の医師はその検体を診断するというように、専門的な技術を行える看護師と医師の役割が分担されているようです。この病院のように、年間 3000 人の小児血液腫瘍疾患をもつ子どもを診ている大きなセンターでは、医師や看護師、ナースプラクティショナー、ソーシャルワーカーやケアマネージャー、Health Educator、Child Life Specialist、通訳など多職種の連携は必要であり、互いに連絡を取りやすいシステムとなっている現状がわかりました。米国と日本の医療システムの違いはあるものの、多職種協働における看護師の果たす役割の大きさを実感し、有意義な訪問となりました。

なお、今回の会議参加および病院訪問は、科研費基盤研究 B「小児がんの子どもと家族を中心と多職種協働チームの看護師支援プログラムの開発」（研究代表者：内田雅代）の助成を受けたものです。

（文責：大脇百合子）

訪問を歓迎してくださった CHLA のスタッフの方々と一緒に
下中央：Ms.KathleenRuccione,MPH,RN,CPON,FAAN

おしらせ

九州山口小児がん看護研修会　開催！

下記の要領で九州山口小児がん看護研修会を開催することになりました。詳細につきましては、あらためてお知らせいたします。

記

テーマ：病名や病状についての説明

日時：2010 年3月 20 日（祝）　10:00～16:00

場所：別府国際コンベンションセンター

ピーコンプラザ中会議室　（大分県別府市）

主催：大分大学医学部看護学科

後援：日本小児がん看護学会

（なおこの研修会は、平成 21 年度科学研究費補助金「小児がんの子どもと家族を中心とした多職種協働チームの看護師支援プログラムの開発」（研究代表者：内田雅代）を使用しています）

第８回日本小児がん看護学会のお知らせ

第8回日本小児がん看護学会は、日本小児血液学会、日本小児がん学会、がんの子供を守る会とともに、大阪で開催します。会期は、例年より1カ月遅い 12 月 18 日(土)･19 日(日)になっておりますので、ご注意ください。大会テーマは、「叡智の結集－過去、現在。そして未来へ」に決まりました。皆様の興味、期待に応えられるような企画を練っていきたいと思っております。

多くの皆様からの演題応募と、ご参加をお待ちしております。

（第 8 回日本小児がん看護学会　会長　藤原　千恵子）

記

会期：2010 年 12 月 18 日（土）･19 日

場所：大阪国際会議場

大会テーマ：叡智の結集－過去、現在、そして未来へ

会長：藤原千恵子（大阪大学大学院医学系研究科）

HP：http://www.congre.co.jp/isph-jspo2010/

SIOP2010 へのお誘い

来年の国際小児がん学会（42th International Paedeiatric Oncology Conference）は、***2010 年 10 月 21日（月）～24日（木）ボストン***で開催されます。詳細につきましては、学会 HP をご確認ください。（http://www.siopboston2010.com/）

世界各国からのナースたちが看護実践を報告したり、小児がん看護における教育や研究について発表し、意見交換を行います。教育講演、医師との合同セッション、当事者や親の会との合同セッションも計画されます。臨床看護師の参加の多い学会ですので、是非臨床の皆様ご一緒に参加しましょう。（早期登録 325 ドル-5 月 31 日まで-。今回は学会前の 10 月 20 日-21 日にボストン小児病院での研修も企画されています(参加費 300 ドル)。

第 34 回APHONカンファレンスのお知らせ

第 34 回米国小児血液腫瘍看護学会議（The 34th Association of Pediatric Hematology／Oncology Nurses Conference）が、2010 年 10 月 14 日～16 日、ミネアポリス（ミネソタ）にて開催されます。抄録締め切りは　1 月 12 日です。臨床に役立つ教育セッションが多い会議ですので、会員の皆様、是非ご参加ください。

HP：http://www.aphon.org

小児がん看護（第５号）への投稿のご案内

本学会の主たる事業の一つである学会誌（小児がん看護）第5号の発行を、予定しております。

第 5 号の投稿期日は、**2009 年 12 月 25 日(金)消印有効**です。小児がんの子どもと家族へのケアの質の向上と看護師の専門性を高めるために、小児がん看護の知見を集めて叡智を結集することを目指し、多くのご投稿をお待ちしております。

投稿規程など、詳細につきましては、学会ホームページや既刊されている学会誌をご参照ください。

学会ホームページアドレス　http://jspon.com

追記：本号には、ＳＩＯＰニュースレター日本語版と、小児がん看護第 4 号の巻頭に掲載した「Nursing Roles in the Care of Childhood Cancer Survivors: Using Uncertainty in Illness Theory as Guide」の日本語訳を同封しました。

論文の和訳は、会員の井上冨美子さんに訳していただき、梶山会長が監修をしてくださいました。どうも有難うございました。

日本小児がん看護学会機関誌担当

淑徳大学看護学部　小児看護学　　小川純子
千葉県こども病院　看護部　　小原美江

［連絡先］
〒260-8703 千葉市中央区仁戸名町 673
E-mail：junogawa@soc.shukutoku.ac.jp
（小川）